

# 第1版発行にあたって

医療はこれから大変革の時を迎えると言われている。もちろんこれまでも変革はあったが、これまでは主として量的変革であり、これからは質的変革になると考えられる。

どういうことかということ、これまでは医科学の発展とともに知識が増大してきた。壊血病やアジソン病、バセドウ病など、昔は訳の分からない病気だったのだが、原因が特定できて治療が可能となった。そして近年になるほど医科学的知識の量的増加速度は凄まじくなり、医学の教科書の分厚さは常軌を逸しているとも言える。全てを暗記するのはもはや不可能となり、専門分化で細切れにすることで膨大化する知識を何とかカバーしている。しかし、それも限りがある。

ところが最近になって状況は変わろうとしている。人工知能の進化が医療に応用されつつある。われわれ医療専門職もコンピューターに頼らない日は一日としてない。人工知能はこれまでの全てのデータ蓄積から瞬時に最も良い解答を出してくる。こうなると専門職業人が苦勞して医学知識を覚えることの意味が薄れる。この方向は医学に限らず看護学、薬学など全ての医療の基盤に及ぶ。そして近未来、人工知能に頼らずして医療は不可能となるだろう。このような人工知能による変革は、これまでの量的変革とは異なる質的変革と呼ばざるを得ない。人工知能がすべての判断を下す医療とは一種の悪夢だが、現在これが単なるSF物語ではすまない状況まできている。

ただし医科学的知識のほとんどが人工知能に頼らざるを得なくなっても、行動科学分野は最後に砦になるかもしれない。これは行動科学自身が未成熟なため人工知能の解析にかかりにくいという状況のせいかもしれない。しかし、病気はいつの時代も待ってはくれない。我々は、今ある智慧を総動員していくしかない。そのためには全ての医療人が今一度、自らの医療行動科学を見直し、整理してみる必要がある。

本書は日本保健医療行動科学会が総力で、全ての医療人や学生が基本に戻って学び直せる保健医療行動科学の教科書を目指して発刊された。この教科書が広く読まれ、我が国の保健医療行動科学の発展に資することを期したい。

2017年 3月

日本保健医療行動科学会会長

中川 晶